

〈研究ノート〉

西オーストラリア諸大学の日本文学関係蔵書

福 田 秀 一

2003 年の 9 月下旬から 12 月初めまで、オーストラリア西南部の都市パース Perth¹⁾ に滞在した。家内がこの期間、その郊外にあるカーティン工科大学 Curtin University of Technology の公衆衛生学部 School of Public Health に赴任した——詳しく言えば同学部内の女子栄養大学パース事務所 Kagawa Nutrition University Perth Office に駐在した——からである。

パースはオーストラリア第四の都市²⁾で（第一～三はシドニー・メルボルン・ブリスベーン、第五はアデレード）西オーストラリア州の州都。同州はオーストラリア大陸の西側三分の一を占めるが、主な施設はパースに集中しており、大学も国立が二つ、私立が三つある。国立は西オーストラリア大学（University of Western Australia: UWA＝ユー・ダブルユー・ユーと通称する）と前記カーティン工科大学、私立はイーディス・カウアン Edith Cowan University, マードック Murdoch University, ノートル・ダム Notre Dame University の三大学である。

これらの大学には、後にも言うように日本文学や日本文化を専攻する学科・課程はない。そしてこれらの大学の名はパースという地名とともに、恐らく多くの日本文学研究者には馴染みの薄いものと思われる。そのような大学にどの程度の質・量の日本文学関係の蔵書があるものか、折角パースに滞在した機会に調べてみようと思い立ち実行したのが、以下の報告である。ただ、二つの国立大学は直接図書館を調査したが、三つの私立大学については、後に述べるような間接調査の結果であることをあらかじめ断っておく。

1、カーティン工科大学

パースの東南郊、ベントリー Bentley という所に広大なキャンパスを有し、甚だ多くの部局 (Institute, School, Division) や学科 (Department) 等——これら各組織の学内における位置や相互（上下）関係は分かりにくい——から成るが³⁾、大学名からも予想される通り、それらの大部分は理科系である⁴⁾。その中に文科系と言えるものとして、① School of Economy and Finance とか ② Department of Education, ③ Faculty of Education, Language Studies and Social Work そして ④ Division of Humanities あるいは ⑤ Department of Languages and Intercultural Education (①～⑤の番号は今付したもの) などがある⁵⁾。けれどもそれらにも日本文学のコ

ースは無く (④には Literature のコースは無い)、わずかに ⑤の中にある Asian Studies のコースの中に、言語としての Chinese (Mandarin すなわち北京官話), Indonesian, Korean と並んで Japanese が挙げられているだけである。

そのような大学がどの程度日本文学関係の図書・雑誌を所蔵しているかを知るべく、先ずホームページの “Library” で “Library Catalogues” を出し、その中の “Total Catalogue—List of Records” で Keywords を “Japanese literature” として検索してみると、104 点が出てきた⁹⁾。それらは収蔵年代順 (新しいものが前)、それが同年のものは著者のアルファベット順に掲出されており、冒頭の 10 点を示せば、以下の通りである (大文字・小文字の使い分けは原文通りだが、著者名に付された生年や書名に付された共著者名と時に記されている “1st ed.” そして配架番号等は省く)。但しこのリストの冒頭には発注済で未入荷のもの (従って配架番号はない) も挙げられており、1～6 がそれである。

| | | | |
|----|--|--|------|
| 1 | Ashkenazi, Michael | Handbook of Japanese mythology | 2003 |
| 2 | De Gruchy, John Walter | Orienting Arthur Waley: japonism, orientalism, and the creation of Japanese literature in English | 2003 |
| 3 | Graham, Fiona | Inside the Japanese company | 2003 |
| 4 | | Japanese colonialism's Taiwan new literature: poetry | 2003 |
| 5 | | Japanese colonialism's Taiwan new literature: documents | 2003 |
| 6 | | Japanese colonialism's Taiwan new literature: fiction | 2003 |
| 7 | Brown, Janice | Across time and genre: reading and writing Japanese womens text: conference proceedings | 2002 |
| 8 | Childs-Leatherbury, Linda C. | Cash flow and security valuation[microfilm]: An empirical analysis of financial statement accounting earning models on Japanese Keiretsu firms | 2002 |
| 9 | Association of Teachers of Japanese (U.S.) | Japanese language and literature: journal of the Association of Teachers of Japanese | 2001 |
| 10 | Kuriyama, Shigehisa | The imagination of the body and the history of bodily experience | 2001 |

また、このリストの末尾すなわち最も古く収蔵されたもの (および収蔵年代を欠くもの) 5 点を示してみる。

| | | | |
|-----|----------------------|---|------|
| 100 | Arabian nights | Arabian naito/told by E. Dixon | 1959 |
| 101 | Keene, Donald | Modern Japanese literature: an anthology | 1956 |
| 102 | Keene, Donald | Anthology of Japanese literature from the earliest era to the mid-nineteenth century | 1955 |
| 103 | Burnett, Ian William | A study to identify possible changes to the Income Assesment Act 1936 which would produce incentives for increased savings by Austsralian taxpayers [microfilm] | |
| 104 | Yamagiwa, Joseph K. | Readings in Japanese literature | |

この目録(リスト)には、上の7・9・103に見るように、狭義の図書だけでなく、会議録・雑誌の類や学位論文のマイクロフィルムも含まれている(10も国際日本文化研究センター＝日文研の「国際シンポジウム集」15である)。また100は中野好夫訳の岩波少年文庫二冊でいわゆる和書であり、一方で8・10・103のように「日本」に関する文献ではあっても「日本文学」とは全く関係ないものも入っている(ただ、検索キーワードをJapanese literatureとした結果は、ほとんどの場合この二語がandで処理されており、この三例のようにorで処理されたかと思われるものは少ない)。また、1(恐らく「神話・伝説」の部に配架されるであろう)とか*Cartographies of Desire: Male-male Sexuality in Japanese Discourse, 1600-1950*(近世以降の男色描写の研究で、西鶴なども取り上げ、分類配架記号306.76=Homosexual)のようなものも入れており(もちろん妥当な処置である)、そうしたものを併せて、104点を収めている。

ところが、実際に中央図書館(T. L. Robertson Libraryという。全館開架式)に入ってみると、日本文学(DDC=デューイ十進分類の895.6)の書架には約315冊(約35冊×9段)が数えられ、その他に上の100のような和書⁷⁾が約120冊(約40冊×31段)別置されている。従って、さきのリストには少なくとも400点(右の1や22のようなものも入れていることを考えれば450点以上)が掲げられていなければならない筈であるが、その差の原因・由来は司書に尋ねても分らず、書架のどの本がリストに漏れているのか、短時間の調査では発見できなかった。

しかしながらこの図書館には、上の101・102のアンソロジー(それぞれ同内容の他の版もある)や同じキーンの日本文学史の連作(*World within Walls, Dawn to the West, Seeds in the Heart*)、小西甚一・加藤周一それぞれの日本文学史の英訳、久松潜一(講談社インターナショナルの英訳、因みに久松の著作はこの一点のみ)の*Biographical Dictionary of Japanese Literature*、アストンの日本文学史(タトルのペーパーバック版)、J. Thoms Rimerの*A Reader's Guide to Japanese Literature* (2nd ed.)、Earl R. Minerの*The Princeton Companion to Classical Japanese Literature*のよ

うな基本的な文献はあり、日本学術振興会の英訳万葉集（戦後の版）や土居光知らの *Diaries of Court Ladies of Old Japan* (AMS Press, 1970 の復刊)、近年のものでは Shirane Haruo の *Inventing the Classics: Modernity National Identity, and Japanese Literature*、Cynthia O. Ho 他編の *Crossing the Bridge: Comparative Essays on Medieval European and Heian Japanese Women Writers* などいろいろあるが、やや目立つのは（以下、書名のみ挙げる）*Dangerous Women, Deadly Words: Phallic Fantasy and Modernity in Three Japanese Writers*（泉鏡花・円地文子・中上健次についての論）、*Mad Wives and Island Dreams: Shimao Toshio and the Margins of Japanese Literature*、*Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*、*Be a Woman: Hayashi Fumiko and Modern Japanese Women's Literature* のような、女性を扱ったものや女性作家とその作品についての研究・評論である。これらを含む右のような収書が、前述のような状況のこの大学でどのように活用されているのか（あるいはアジア研究の一環に利用することもあるのか）、日本研究を専門とする教官も居なくて聞き出すことはできなかったが、考えようによっては、何かのときに日本文学に関心をもった人がこれらの本を手にするができるのは、良いことかも知れない。

以上は検索キーワードを *Japanese literature* とした場合の結果であるが、*Japanese theatre* で検索して 13 点、*Japanese mythology* で 5 点を得た⁸⁾。前者には T・インモースの *Japanese theatre*（原著はドイツ語だから、その英訳と思われる）やキーンの能や文楽の翻訳、T・ライマーの *Toward a Modern Japanese Theatre: Kishida Kunio*、Benito Ortolani の *The Japanese Theatre: from Shamanistic Ritual to Contemporary Pluralism* など、後者には前掲の 1 やフィリップパイの「古事記」英訳の他、日本あるいは東洋の神話に関する一般向の書などが挙げられている。

因みに、2002 年の統計では次のごとくである。

図書館

| | |
|--------------|---------------------------|
| 蔵書数（逐次刊行物以外） | 566,441 冊 |
| 購入している逐次刊行物 | 15,737 タイトル |
| 収書予算 | 5,329,710 ドル（1 ドル＝約 80 円） |
| 予算総額 | 12,250,317 ドル |

大学全体

| | |
|-----------------------------|----------|
| 学生数（登録者） | 32,918 人 |
| 職員（教官・事務官併せて） ⁹⁾ | 2,667 人 |

2、西オーストラリア大学(UWA)

パース市内の西部にあり、注 5 に挙げた国際日本文化研究センター編『海外日本研究機関一覧 2000 年版』には School of Asian Studies の中に The Japanese Studies Program（1970 年設立）を挙げているが、現在この名の部局は無い。The School of Social and Cultural Sciences の中に Asian Studies の program があって、カーティン工大と似て、言語としての Chinese,

Indonesian, Japanese が挙げられているだけである（インドネシア語があるのは、地理的に近く人々の往復や交渉が多いからである）。

キャンパス内にはいくつか理科系学部の図書館もある（例えば数学・物理学の図書・雑誌は Mathematics and Physical Sciences Library が収蔵している）が、ここで必要なのは中央図書館（Reid Library という）である。カーティン工大と比較しやすいように、初めに統計数字を示す。

図書館（恐らく全学であろう）

| | |
|------------------------|--------------|
| 冊数（1995 年、雑誌類を含むか否か不明） | 174,254 冊 |
| 全予算（恐らく人件費も含む） | 9,953,359 ドル |
| 学生数（1997 年登録者） | 14,114 人 |
| 職員総数（同年） | 2,413 人 |
| うち教官数 | 976 人 |

前述のカーティン工大のホームページの“Library Catalogues”を開けると、“WA University & International Library Catalogues”の見出しがあり、カーティン工大を除いた WA（西オーストラリア州）内の大学（前述の国立 1・私立 3）図書館ならびに他の図書館類（それらについては 6 に一言する）の名が列挙されていて、その中の University of Western Australia をクリックして“Entire Catalogue”でキーワードを Japanese literature として検索すると、書名アルファベット順に 238 点が出てきた¹⁰⁾。その冒頭 10 点と末尾 5 点を示せば、次の通りである。

- 1 Ainu jojishi Kamui-yūkara Oina no kenkyū 1977
- 2 Akutagawa Ryūnosuke shū 1971
- 3 The American occupation of Japan and Okinawa: literature and memory/Michael S. Molasky 1999
- 4 Anais Nin: literary perspectives/edited with an introductory essay by Suzanne Nalbantian 1977
- 5 An annotated bibliography of Japanese literature on the tuna (excluding southern bluefin tuna) and billfishes of the the Coral and Tasman Seas, Ron Green, CSIRO Marine Laboratories 1988
- 6 Anthology of Japanese literature to the mid-nineteenth century 1968
- 7 Anthology of Japanese literature: from the earliest era to the mid-nineteenth century/comp. and ed. by D. Keene 1956
- 8 Anthology of Japanese literature: from the earliest era to the mid-nineteenth century/comp. and ed. by Donald Keene 1956
- 9 Arishima Takeo shū 1969

- 10 Artistic detachment in Japan and the West: psychic distance in comparative aesthetics/
Steve Oden c2001
- 234 Writers and society in modern Japan/Irena Powell 1983
- 235 Writing across worlds: literature and migration/edited by Russel King, John Connell &
Paul White 1995
- 236 Writing ground zero: Japanese literature and the atomic bomb/John Whittier Treat 1995
- 237 Yokomitsu Riichi, modernist/Dennis Keene 1980
- 238 Zen Buddhist landscape arts of early Muromachi Japan (1336–1573) /Joseph D. Parker
c1999

この中 2 と 9 は講談社の『日本現代文学全集』(昭和 40 年代、全冊揃)の各巻、6 は 7・8 と同内容で、6 の書名は途中を省略したものと見られる。また地域性を示す 5 は、カーティン工大にもある。そして 10 や 238 のように文学とはやや離れたものも含んでいるが、前項の中で例示したいくつかの基本的な文献や雑誌『国文学解釈と鑑賞』(昭和 26～47 年)、『国文学年鑑』(昭和 52 年以降数年分)もあり、ある程度充実している。

ところでこの図書館(ここも全館開架式)も、実際に書架を歩いてみると、リストの点数よりはるかに多い冊数を数えることができる。すなわち、和書は洋書(実はすべて英語のようで、この点はカーティン工大も同じ)と別置されているが、後者すなわち洋書だけで約 35 冊×14 段=約 500 冊あり、上のリストに複数冊のものがいくつかあるにしても、その差は大きい。更に前者すなわち和書(辞典類や美術書・社会科学書、シリーズ『内科診療』からラベルなく未登録らしい児童書『うさぎのみみはなぜながい』などもある)は各段約 35 冊を収める 7 段の書架 24 を占め、うち文学は 4 架と 2 段(つまり 30 段=100 余冊)、その中には至文堂の『日本文学新史』(ペーパーバック版)、日本古典文学大系(一・二期全巻)・明治文学全集(これらの各冊は右のリストには掲出してない)、漱石全集(昭和 49 年の菊判)、鏡花全集、谷崎潤一郎全集から橋本治の『絵本徒然草』まで種々のものがある。また逐次刊行物の 5 架は週間朝日・文藝春秋・東海大学紀要・言語生活など(いずれも 1970 年代が中心)が多く、その段(棚)を占め、『国語年鑑』(1998 年まで)・『国語学』(2003 年)などもあった。例示した書名で見ると、カーティン工大と同様、日本文学ないし日本文化を追究するのに有用なものも少なくない(しかしこれだけでは、近刊のものをはじめとして、不足のものが多いことは言うまでもない)が、現在は死蔵されていると言わざるを得ない。

なおこの図書館について、キーワードを“Japanese theatre”および“Japanese drama”として検索してみると、前者で 60 点、後者で 21 点(初めの検索では各 25 点・7 点)が出てきた。この両リストは古典大系の各巻を分出しており、『謡曲集』のように両方に出ているものもあるが『浄瑠璃集』や『文楽浄瑠璃集』は“Japanese drama”の方にしか見えないなど両者には

相当の出入りがあり（因みに『近松浄瑠璃集』や『歌舞伎脚本集』は書庫にはあるがどちらのリストにも見えない）、カーティン工大のリストにもあった *An actor's revenge* [Yukinojō henge] / Ian Breakwell, British Film Institute, 1995（注、映画台本の日本語対訳）や前記インモースの *Japanese theatre*, オートラニーの *The Japanese theatre: from shamanistic ritual to contemporary pluralism* などは前者 (Japanese theatre) のみに見え、反対に *The Art of Kabuki: famous plays in performance/ translated with commentary by Samuel L. Leiter* (c1979)、*The ballad-drama of medieval Japan*（注、ジェームス・T・アラキの幸若舞の研究）(1964) 以下多数が後者 (Japanese drama) のみに見えて、リストだけでこの図書館の日本文学関係図書の全貌を知るのは困難のようである。

3、マードック大学

パースの南部マードック（フリーマントルからカーティン工大に向かって半分足らずの所）にあり¹¹⁾、Division of Science and Engineering や Division of Veterinary（注、獣医の）and Biomedical Sciences といった理科系の学部に交じって Division of Social Sciences, Humanities and Education（その中に Asian Studies のコースがある）があって、西オーストラリアでは文科系の傾向の強い大学のようなのである。東方学会会員でかつて京大に留学し、唐代史を専攻して現在フリーの翻訳家（特に学術文献）としてパースに住む H 女史も、一時この大学の教壇に立っていたと言っていた。

この大学の図書館について、前項 (UWA) と同様の手順で① Japanese literature ② Japanese theatre ③ Japanese drama をキーワードとして検索すると、① 173 点、② 40 点、③ 52 点を掲げたリストを得た。いずれも既述の二大学のリストと同様、和洋書混載で、相互間の重複はあまり多くない。そして①では *The American occupation of Japan and Okinawa: literature and memory* や *An annotated bibliography of Japanese literature on the tuna etc.* あるいはキーンのアンソロジーや加藤周一の『日本文学史序説』の英訳など、それらに見えていたものも多いが、野間宏の『新しい時代の文学』（原著）、津田左右吉の『文学に現れた国民思想の研究 町人文学の時代』の英訳、*The Dawn that never comes: Shimazaki Toson and Japanese nationalism*/Michael K. Bourdaghs (c2003) など、既述二大学に見えなかったものもあり、注意される。②には *Takarazuka: sexual politics and popular culture in modern Japan*/Jennifer Robertson (c1998) などの他、*The theatrical prints of the Torii masters: a selection of seventeenth and eighteenth-century Ukiyo-e*/by Howard A. Lin (1977) や *The theatrical world of Osaka prints: a collection of eighteenth and nineteenth century Japanese woodblock prints in the Philadelphia Museum of Art*/by Roger S. Keyes and Keiko Mizushima (1973) のようなもの、③には *The drama of W. B. Yeats: Irish myth and the Japanese no*/Richard Taylor (1976) や *Die Entstehung des Kabuki: Transkulturation Europa-Japan im 16. und 17. Jahrhundert*/von Thomas F. Leims (1990), *Le no* (1944) などが注意される。最後のはノエル・ペリーの著と思われる、その前のは独文の比較演劇論であるが、このような英語以外の言語の洋書は、他の大学には見られない。ある時期にそれらを解する教員が居たのであろう。

4、ノートル・ダム大学

パースの南西部、港町フリーマントルの市街にあり（この町を観光した際に立ち並ぶ校舎ビルの外側のみを見た）、ホームページの“Course information”に挙げられた科目数は50余に上る。その中には Applied Sciences—Health & Physical Education とか Information & Communications Technology や Law & Biomedical Sciences のような一応理科系のものもあるが、Arts and Humanities とか English Literature and Theatre Studies あるいは Italian Language and Culture のような文科系の科目が少なくない。しかし Japanese はもちろん、Asian あるいは Oriental とつくものは無い。

この大学の蔵書については、今まで用いてきたデータベースで“Keyword”でなく“Subject”で検索するのだが、その結果は次のように各類の点数で表示される（今、便宜のため界線を引き、番号を付した）。

| | |
|--|----|
| (1) Japanese literature – 1868 History and criticism | 1 |
| (2) Japanese literature – Addresses, essays, lectures | 1 |
| (3) Japanese literature – History and criticism | 6 |
| (4) Japanese literature – Themes, motives | 1 |
| (5) Japanese literature – Translations into English | 3 |
| (6) Japanese literature translations into English | 1 |
| (7) Japanese literature – Translations into foreign languages - Bibliography | 1 |
| ----- | |
| (8) Japanese poetry – 1868 Translations into English | 1 |
| (9) Japanese poetry (Collections) | 1 |
| (10) Japanese poetry – History and criticism | 1 |
| (11) Japanese poetry (Selections: extracts, etc.) | 1 |
| (12) Japanese poetry – Translation into English | 1 |
| (13) Japanese poetry – Translations into English | 12 |
| ----- | |
| (14) Japanese drama – Hist. & crit. | 1 |
| (15) Japanese drama – History and criticism | 1 |
| (16) Japanese drama – Translations into English | 1 |
| ----- | |
| (17) Japanese fiction – 1868 History and criticism | 1 |
| (18) Japanese fiction – History and criticism | 1 |
| (19) Japanese fiction – History and criticism | 1 |
| (20) Japanese fiction – Translations into English | 1 |

これらの中に、(5) と (6)、(12) と (13) あるいは (18) と (19) のように、ほとんどあるいは全く同じ名で分類されているものがあるが、いささか不審だが、個々に出してみると、例えば (12) は *One Hundred Poems from the Japanese* by Kenneth Rexroth (注、「百人一首」の英訳、1955 刊か)、(13) は *An Anthology of Haiku, Ancient and Modern*, translated and annotated by Asatarō Miyamori (Maruzen, 1932)、*An Anthology of Modern Japanese Poetry*/edited & translated by Ichiro Kōno, Rikutarō Fukuda (Kenkyusha, 1957)、*An Introduction to Japanese Court Poetry* [by] Earl Miner (Stanford University Press, 1968) その他で、右の各分類の区分は正確とは言えない (例えば、最後のマイナーの書は、例歌多数の英訳も添えているが、基本的に中古中世和歌史の略説で、翻訳の部に入れるのは適切でない)。

しかしながら、多くない収書の中にはキーンやウエダ・マコト、古くはライシャワーやヤマギワなどの選集や著作、*Japanese Literature in European Languages: a Bibliography, compiled by Japan P.E.N. Club* (1961) のような基本的なものもあり、誰がどのような意図で集めたものか、気にはなる。

5、イーディス・カウアン大学

パースの北部にある大学で、“YAHOO! Australia & NZ” の Edith Cowan University > Departments and Faculties によれば、学部・学科としては Department of Computer Science; Faculty of Communications, Health, and Science¹²⁾; Faculty of Business の三部科だけの小さな大学のようなものである

この大学の日本文学関係蔵書も、今までの大学と同じ手段で検索したが、キーワードを① Japanese literature, ② Japanese theatre, ③ Japanese drama として、それぞれ書名アルファベット順に 59・25・28 点を得た。①に *Japanese family*/Judith Elkin; photographs by Stuart Atkin (c1986) や *Konnichi wa: an introduction to Japanese*/Alan Rowell, Laureal Hall (1989)、②に *Teaching personality with gracefulness: the transmission of Japanese cultural values through Japanese* (1993) のように各分類に妥当しないものもあるが、ほとんどは 1~4 の大学にもあり、日本の文学・演劇を研究しあるいは知るには適当なものである。②に見える *Women's gidayu and the Japanese theatre tradition*/A. Kimi Coaldrake¹³⁾ (1997) など、どうしてこの大学にあるのか、不思議と言えば不思議である。

なおこれらのリストに載せるものは、①に見えるキーンの二つのアンソロジー等を除き、ほとんどが 1970 年以降の刊行書で、一番新しくは①に *Learning to request in a second language* (副題略)、③に映画『影武者』のビデオ (共に 2002 年) などがあるが、近年も収書が行われていると思われる。

6、州立参考図書館および英米の図書館

2 の項でふれたが、カーティン工大のホームページの Library Catalogues から “WA University

& International Library Catalogues”を開けると、2～5の各大学図書館の他に、(a) State Reference Library (Alexander Library), (b) Joint Serials Catalogue of Health Libraries in Western Australia, (c) Australian Libraries の三つの名が出る。この中、b は内容的に今回不要で、c も本稿の範囲からは外れるので、a についてだけ述べる。

この図書館は正式には The Library and Information Service of Western Australia と言い、LISWA と略称するらしく、右の頁で a をクリックすると、“Welcome to the Library and Information Service of Western Australia—Search Page”の見出しで、You May Search/The LISWA Catalogue と出るので、その“The LISWA Catalogue”をクリックして Keyword, Author, Title その他の選択肢の中から Keyword を今までと同様 ① Japanese literature, ② Japanese theatre, ③ Japanese drama として検索し、それぞれ 141・18・44 点が書名アルファベット順に記されたリストを得た。5 の場合と同様キーンのアンソロジー (①に載せる) の他はほとんどが 1970 年以降のもので、最も新しいものは①の *Asian masculinities: the meaning and practice of manhood in China and Japan* (2003) や *Sushi for kids: a children's introduction to Japan's favorite food* (2003) であるが、この二例で見ると、リストの冒頭には (①の場合) Both “JAPANESE” and “LITERATURE” are in 141 titles. とあって Japanese と literature の積で検索したとあるが、入力時のキーワード処理が不十分なためか、今までの大学図書館の場合と同じように検索リストとしては不備の多いもので、文学以外の日本・日本語の関する本の率が、この 6 のリストには特に多い。

また、前記 “WA University & International Library Catalogues”の下には、“International libraries”として、British Library, COPAC, Library of Congress が挙げられている。COPAC とは、その冒頭の説明によれば、イギリスとアイルランドの主な大学の研究図書館 (大まかに言えば専門学徒のための図書館) 24 に大英図書館・スコットランド国立図書館を加えたものの総合目録である。この三つはそれぞれ著者名・書名・件名その他をキーワードとして検索できるようになっており、西オーストラリアに居ながらにしてアメリカ議会図書館と英国の主な大学図書館の蔵書について、ある程度 (有無や書誌・請求番号など) 知ることができるのである。その精度は確かめてないが、仮に 1～6 のように不備が多いにしても、これだけ幅広いデータベースは、利用者によっては有用に違いない。

西オーストラリアの大学その他の図書館に日本文学関係の図書がどの程度収蔵されているかを直接間接に調べた結果は、以上の通りである。どの図書館も専門的な研究のためには十分と言えないが、多少の予備知識のある者¹⁴⁾には有用に違いなく、一方日本文学以外を専攻する教員・学生にとってはほとんどの図書はレベルが高過ぎると思われ、その活用は今後の問題のように思われる。

注

- 1) 西海岸最大の都市で、日本（成田）からも直行便が週三回出ているが、東部のシドニー・メルボルン・キャンベラなどに比べれば知名度は低い。スワン Swan 川の河口に位置し（市の中心は河口の東北約 20 キロ）、河口の港町フリーマントル Fremantle は 1987 年にヨットのアメリカズ・カップの会場となったことで名高く、またかつてゴールド・ラッシュで栄え、その史跡や博物館があって今も金の採掘が行われているカルグーリー Kalgoorlie（パースの東方約 550 キロ）への足場として、鉱山関係者には知られている。
- 2) 『2003/04 世界国勢図会』（矢野恒太郎記念会編刊）が 1991 年現在として示す市域人口、郊外を含む人口は、共にここに示した順である（二位のメルボルンと三位のブリスベンとの差は大きいですが、他の二都市間の差はそれほど大きくない）が、現地ではパースはオーストラリア第五の都市であると聞かされた。
- 3) この大学のホームページの“Schools and Divisions”には、ABC 順に 200 余の部局・学科類が挙げられており、その A の部を示せば次の通りである。
 Aboriginal Studies (Centre for), Accounting (School of), Agriculture (Muresk Institute), Applied Chemistry (School of), Applied Geometry (Department of), Applied Physics (Department of), Applied Science (School of), Architecture and Interior Architecture (Department of), Art(Department of), Australia Research Institute
- 4) しかし次に述べる文科系の学科の他、注 3 の例示に見えるアボリジニ研究センターやオーストラリア研究所といった、地域性を示すものもある。
 なお、前述のように西部（具体的にはパース）にもう一つの国立大学 UWA があり、そちらは一応総合大学で理科系の学部・学科も備えているが、ともすれば世間では、カーティンが理科系の大学であるのに対して UWA を文科系と見る傾向があると、UWA の某教官（物理学担当）は言っていた。
- 5) 国際日本文化研究センター編『海外日本研究機関一覧 2000 年版』は School of Social Sciences and Asian Languages（1968 年設立）を挙げるが、現在そのような部局は無く、カリキュラムの一部は⑤に吸収されていると考えられる。
- 6) これは 2003 年 11 月 20 日に検索した結果であるが、念のため最近（2004 年 1 月 14 日）試みても、全く同じであった。しかし前回の一週間前（11 月 13 日）に同じ手順で検索したときには 1～3 が無く 101 点であった。すなわち 1～3 はこの一週間の間に発注されたものと考えられる。
- 7) その例をかなりアット・ランダムに挙げれば、大字典（縮刷版）・広辞苑（第二版）・大辞林（初版）・日本語の歴史（平凡社）・日本の歴史（中公ペーパーバック版）・近代日本国民史・漱石全集（初版）・福沢全集（大正 15 年版）・厨川白村全集・世界名作童話全集（ポプラ社）そして角川文庫や春陽堂文庫の何冊かなどである。
 なお今問題にしているリストには、*Kites, kimonos and karate: a teacher resource book about Japan* (40) とか *Niko niko* (54) あるいは *A taste of Japan* (55) のように（恐らく日本語教育の日本事情の教材として）教材図書館という別の施設に置かれているものも載せられている。
- 8) 検索キーワードを Japanese history としてみると 1934 年以降のもの 430 点を得た。その大部分は文学とは縁が薄いですが、中に井浦芳信『日本演劇史』の英訳（これは何故か Japanese theatre で出した 13 点には入っていない）などもあった。

- 9) 「全キャンパス」と付記されており、カルグーリー（注 1 参照）・キャンパスの職員も含まれていると考えられるが、その数は僅かと思われる（図書では、当面のリスト 104 点中 1 点である）。
- 10) これは 2003 年 11 月下旬に検索した結果であるが、同 13 日には 157 点しか出ず、不思議なことに 12 月に入って再度検索したときも 13 日と同じく 157 点であったが、2004 年に入って（1 月 17 日）検索してみると、156 点であった。*The proceedings of nature and selfhood in Japanese literature*/Tsurata Kinya, Department of Asian Studies, University of British Columbia Press が削られているが、刊年不明のためかも知れない。
- 11) この大学は、パースの郊外を一周するバスの車窓からキャンパスを瞥見したに過ぎず（5 のイーデイス・カウアン大学も同様である）、次に述べる方法で図書館蔵書リストを一覧したにとどまる。
- 12) 蛇足ながら、この保健関係の学部がある故に、女子栄養大学（英語名 Kagawa Nutrition University）は、UWA・カーティン工科大学とともにこの大学をも提携校としている。
- 13) 因みに、この書の書評（評者 Karen Brazell）が *Monumenta Nipponica* Vol.58 No 2 (May 1999) にある。なお、水野悠子『江戸／東京 娘義太夫の歴史』（法大出版局・2003）は博搜の好著だが、「はしがき」から「索引」「参考文献」までを見ても、この書には言及していようである。
- 14) 仮定として各大学の教員や一般市民を想定しているが、滞在中の見聞では、そうした人々が利用していた形跡はない。